

今年のアートプロジェクトは夕張 ～三笠を結ぶ広域展開

そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014

一種の地域ビエンナーレ…平均して2年
毎に開催してきたアートプロジェクト

炭鉱遺産空間でのアートプロジェクトは、NPO 発足前の2004年 / 住友赤平立坑からスタートして、2009年 / 北炭幌内布引立坑、2011年 / 北炭清水沢火力発電所、2012・2013年 / 住友奔別ホッパーと、これまで5回開催してきました。



2009年布引アートプロジェクト

10年間で5回開催しているので、その頻度は平均2年毎となり、地域ビエンナーレ(2年に一度開催される芸術祭)として注目され、昨秋には「北の聲アート賞」大賞を頂きました。

このアートプロジェクトは、アート自体が目的なのではなく、炭鉱について日頃は何も関心がない方でも、《炭鉱の記憶》に触れ理解して頂くための機会の設定として取り組んでいます。

いわばアートは「手段」ですが、そこにあるアート作品の意味や価値を理解するために観覧者自身に積極的な関与が必要となることから、炭鉱遺産の空間をただ見るだけでは得られない、アートが持つ媒介力に期待してプロジェクトを展開してきました。

すでに観覧者数は累計7,000人を超え、アートプロジェクトを契機に64名の方にNPOへご入会(現在会員数256名の25%に相当)を頂いたことから、その成果があがっている実感を持っています。

「札幌国際芸術祭2014」との連携…近代を問い直すことがテーマに

今年は、札幌市で「札幌国際芸術祭2014」が開催されます(7/19～9/28)。テーマは「都市と自然」で、公式WEBには次のように解説されています。

明治維新とともに北海道と名づけられたこの土地は、まさに日本の近代化を担ってきた象徴ともいえる。

先住民族や自然そのものもその近代化に無縁ではいらなかった。そうした過去の歩みをアートとしてふりかえることで、21世紀の札幌・北海道の自然、都市のあり方、経済、暮らしを模索する。

テーマのド真ん中の存在として「近代」がクローズアップされていますが、そもそも北海道で「近代」と言えば、空知の石炭産業は絶対欠くことのできない存在です。

そこで、今年も空知でアートプロジェクトを展開し、「札幌国際芸術祭2014」との連携を図ることによって、《炭鉱の記憶》に対する認識を高めるような取り組みを企画しています。

札幌が国内外に宣伝してくれるのを好機として捉え、「札幌にアート展を見に来たが、空知を見ないで帰っては片手落ちだ」という声を高めようという、いわば「軒を借りて、母屋を凌ごう」作戦でもあります。

すでに今年2月には、「札幌を創った近代の底力を学ぶ-空知産炭地域から札幌への問いかけ」という5夜連続フォーラムを開催しました。空知とともに北海道近代化を担った小樽・室蘭・鹿児島からも講師と



札幌で開催した「近代」を学ぶ連続フォーラム

して強力な助っ人を得て、「札幌だけで近代を語るつもりなのか!」という強烈なメッセージを発信し、作戦はスタートしています。

8/23(土)～10/13(日)の土日祝日に開催、
メイン会場は清水沢・奔別の2会場

「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト2014」は、8月23日(土)から10月13日(日)の土日祝日の19日間にわたって開催します。

メイン会場は、北炭清水沢火力発電所(夕張市)と住友奔別鉱ホッパー(三笠市)の2箇所。その間を結んでいた今でも鉄塔が随所に残っている北炭高圧送電線の道に沿って、両会場を結ぶ途中にも様々なサイトを展開する予定です。

このアートプロジェクトは、今回も札幌市立大学上遠野敏教授との共同プロジェクトとして実施し、アート展示だけではなくアートを切り口にした地域活性化を担う人材の育成を目指したアートマネジメント講座も同時に展開します。

北炭清水沢火力発電所



北炭高圧送電線の鉄塔



住友奔別鉱ホッパー



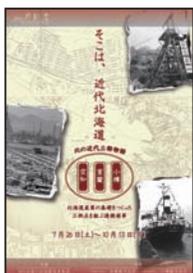
今年も開催「炭鉄港 2014」

小樽室蘭を結ぶ取り組みが5年めに突入

「炭鉄港」は、空知（炭）・室蘭（鉄）・小樽（港）の3拠点とこれら結んでいた鉄道という、近代北海道の形成に重大な役割を果たした歴史的なつながりをクローズアップしようと、2010年度から展開してきました。

今年も、7月23日㊥の幌内線「線路の灯り」（三笠市）から、10月13日㊦に北炭清水沢火力発電所で開催予定のフィナーレまでを期間として展開します。

2012年度から導入した、まち歩き「ぶらぶら」シリーズを軸に、各地の催事を網羅してアピールします。現在、催事情報の集約・調整中で、7月中旬にはポスターやパンフレットを配布すべく準備を進めています。



教育旅行の販促ツール完成

NPOの収益源として旅行業に期待

昨年度、国の緊急雇用助成事業を導入し産業観光・教育旅行のコンテンツ作成を行ってきましたが、その成果としてのパンフレットと副読本が完成しました。

「そらちヘリテージツーリズム」と名付けた一連のプログラムは、炭鉱・鉄道・農業という空知地域の3つのキーテーマを素材に、地域の激変とそこに生活していた人たちの生き様をもとに、来訪者が「空知を通じて自らのことを考える」「生きる力を身につける」ことを目指した、特徴的なツーリズムです。

NPOでは、旅行業に必要な国家資格の保有者が2人もいる（国内旅行業務取扱管理者：吉岡理事長・北口事務局員）という特質を活かして、旅行業（岩見沢市と隣接する市町村を営業範囲とする地域限定旅行業）の登録を行うべく準備を進めており、今秋までには登録にこぎ着け、NPOの収益源の柱として育成したいと考えています。今回作成したコンテンツ集は、旅行業登録にあたって有力な販促ツールになるものと期待されます。



朝日炭鉱閉山から40年

写真展・語る会などを開催

1974年に岩見沢市内最後の炭鉱である朝日炭鉱が閉山してから、今年で40年を迎えます。その節目の年にあたって、様々な催事をNPO主催で開催します。

写真展を、8/13㊧～10/5㊨にセンター石蔵で開催（10/11・10/12は毛陽交流センターに移設し開催）。元朝日炭鉱職員であった竹林博さんが撮影した最盛期の写真や、閉山前後に道新岩見沢支局に勤務していた記者が撮影した写真など、貴重な1960年代の朝日炭鉱線込場の風景映像資料で展示構成します。



9/6㊩には、午前中に朝日炭住街を歩いて巡る「ぶらぶら朝日炭鉱」、午後からは元炭鉱マンをお招きして「朝日炭鉱の話しを聞く会」も開催します。

ブックレット新刊

炭婦協5名の女性たちの語り

昨年11月に岩見沢市で開催した「そらち炭鉱の女性たちが語る集いー炭鉱主婦会・炭婦協の歴史に学ぶー」の内容をまとめたブックレットを、NPOが刊行しました。編者は、催事の主催者である大学教員らの研究組織・産炭地研究会（JAFCOF）で、炭労とともに炭鉱の組合運動を支えてきた主婦たちの貴重な証言集となっています。センターで1冊540円で販売しています。



ベルギーから留学生

トム・アレンツ君…週1回はセンターに滞在

ベルギー北西部（オランダ語圏）のケンペン炭田ヘンク市出身のトム・アレンツ君（29歳）が、今年4



います。トム君は、2011年11月、2012年8月・10月の3回にわたって来日しマネジメントセンターに居候していたので、ご存じの方も少なくないと思います。

吉岡理事長の紹介で留学先となった札幌学院大学には、2014年度いっぱいまで在籍予定で、その間、毎週1回（原則として金曜日だが時には水曜日）はセンターに滞在し研究を行っています。

身長196cm・足は30cmというビッグサイズなので、ひと目ただけですぐわかります。アートプロジェクトのアートマネジメント講座も受講しているため、今秋はたびたび皆さんの前に登場するかと思います。関西学院大学に留学経験があるので、日本語も堪能です。どうか積極的に話しかけて下さい。

2014年度のセンター営業体制

マネジメントセンターは、2009年8月の開設から昨年度まで、補助事業を導入して活動展開してきましたが、本年度からはNPOの独自財源によって運営することとなりました。これまでは2～3人が常勤し休館日も週1日でしたが、この4月からはNPOの持つ経営資源に見合った体制に縮小して運営を継続しています。

- ①一人勤務体制
- ②休館日を1日増（月・火曜日休館／月・火曜日が祝日に重なる場合は開館し祝日翌日を振替休館）
- ③開館時間を短縮（10:30～17:30）

4月から在勤主力メンバーは、北口博美・秋元さなえの2名です。



北口博美 秋元さなえ

センター開設時から事務局次長としてセンターに滞在してきた前田亜紀さんは、札幌転居を機にかねてから希望していたホスピスに関わる仕事に取り組みたいとの希望で5月31日付退職となりました。前田さんには、運営会員として、今後もプロジェクト単位での活動に参画して頂く予定です。

人事異動

3月23日▷退職・雇用期間満了／川口里絵（主任研究員）、谷中章浩・倉知素子・秋元さなえ（事務局員） 4月1日▷プロジェクトディレクター／佐藤真奈美（研究員） 5月1日▷採用（期間限定：事務局員）秋元さなえ 5月31日▷退職・自己都合／前田亜紀（事務局次長）